

社会科学教育としての地理授業

— 「都市と権力」の教授書開発 —

草原 和博・森分 孝治・棚橋 健治

(1996年9月9日受理)

(研究協力者) 植田 健・中原 朋生・古川 貴史・安部 博貴・小野 順子・
宮兼 和公子・宮崎 修子・三好 勝美

The Geography Lesson as Social Sciences Education
— The Development of Teaching Materials, “Unit: The Urban and Power” —

Kazuhiro Kusahara and Takaharu Moriwake and Kenji Tanahashi

This paper aims to develop the teaching materials on “The Urban and Power”. The contents of this unit are as follows. (1) The Urban’s Risks and Attractions, (2) The Urban and Economic Power, (3) The Urban and Political Power, (4) The Urban and Religious Power, (5) The Urban and Rural, (6) The Urban and Power in Japan.

はじめに

I. 教授目標—権力の科学的認識—

本稿は、社会科学科の教科原理を具体化する教授書の開発を意図するものである。日本の権力構造を解明したウォルフレンによると、日本社会には国民を「知る者」と「知らざる」ものに峻別し、普通の人には「もっともらしいウソ」を与え、真実はエリートのみが知る、無知の再生産システムが成立しているという¹⁾。氏の指摘を教科教育の立場から解釈するならば、今日こそ学校教育には、あらゆる子どもの精神を知的に解放してゆくことが、そして一教科としての社会科には、子どもの行動様式を拘束している権力現象を対象化し、その論理を科学的に認識させることが求められている。社会そのものでありながら、子どもや一般市民からは隠蔽された世界、それが「権力」である。

本研究では、近年の社会科学の成果に学びつつ²⁾、権力の本質を「機関による保障と支配」と「保障による支配の正統化」に求め、それぞれを前後半2つの展開部から探求させる、投げ込み単元を開発した。

II. 内容構成 —都市の比較社会研究—

本単元では、権力の発生源を「都市」とみなし、都市の比較研究を通して「権力」の本質を解明しようと

する社会科学理論とその典型事例を取り上げた。

展開部Iでは、経済、政治、宗教、それぞれの権力が形成した都市事例として、マニラ、ブラジリア、ソルトレイクシティを提示し、人間の存在を「保障」し「支配」する権力の基本構造を理論化させる。展開部IIでは、あらゆる権力が集積した都市として、旧ソ連のモスクワを取り上げ、農村よりも都市へ優先的に保障を与えることで、現行の社会体制を「正統化」しようとする権力の自己再生機構を把握させたい。

小単元の配列は、これまでの研究成果を参考に³⁾、「理論批判学習」の探求過程を採用した。まず導入部では、阪神大震災を手がかりにして、都市の危険と魅力を「直観的に学習」させ、展開部では、権力という視点から都市の形成と解体を説明する理論を「分析的に学習」させる。そして終結部では、これらの理論を吟味・修正し、発展させるべく、日本の都市の権力構造を「総合的に学習」させるように組織されている。

III. 単元の特質と意義—社会科学教育としての地理—

本単元の特質は、以下の2点にある。その第1は、研究対象のグローバル性である。世界諸地域における都市の比較研究を通じてこそ、権力の実態はよりよく解明されるし、子どもは、習得した社会科学の分析概念を用いて、自分たちの住む日本社会の現状を客観的

に捉え直すことができる。

第2は、研究方法の空間的視点である。権力は、自己の拠点だけでなく、そこを越えて広域的に作用し、社会に様々な空間的格差や対立を生み出している。この都市内部と外部の相互関係を浮き彫りにしてゆくこ

とが、権力の本質に迫る最も意義あるアプローチといえよう。本教材を地理単元として開発した理由が、ここにある。なお紙面の都合で、以下では単元構成と教授学習過程を示すに留めたい。

1. 単元名 「都市と権力」

2. 単元の目的 都市空間の社会（権力）構造を解明する。

3. 単元の構成 高等学校 地理歴史科「地理」、あるいは公民科「現代社会」：計6時間

導入部 「都市の魅力と危険」

展開部Ⅰ 「都市形成の論理」

パート(1) 都市と経済権力 -マニラの場合-

パート(2) 都市と政治権力 -ブラジリアの場合-

パート(3) 都市と宗教権力 -ソルトレイクシティの場合-

展開部Ⅱ 「都市非解体の論理」

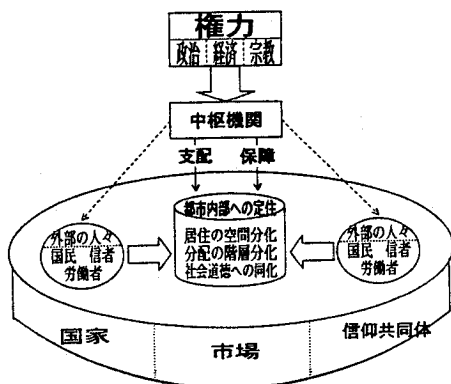
パート(4) 都市飢餓と農村 -モスクワとウクライナの場合-

終結部 「日本の都市と権力」

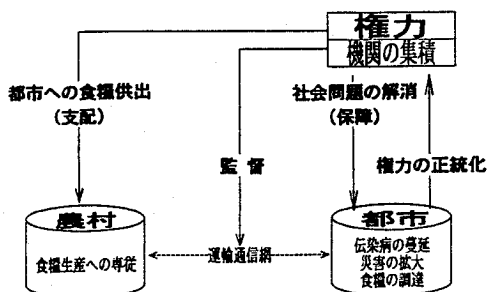
4. 到達目標

◎ 都市空間の権力構造モデル

A. 都市形成の権力構造



B. 都市非解体の権力構造



◎概念的知識

I. 都市は人口の密集地であると同時に、食糧の非生産地であるため、潜在的に、疫病の蔓延や災害時の被害拡大（類焼）、食糧供給の確保、という問題を抱えている。

II. 都市には、疫病・災害・飢餓などの「都市を解体する力」よりも、政治・経済・宗教権力による「都市を形成する力」の方が強く作用するために、都市には外部から大量の人口が流入し、定住する傾向にある。

2-A. 政治・経済・宗教の各権力が、市場（労働者）、国家（国民）、信仰共同体（道徳観）、それぞれを「支配」する「中枢機関」を設置すると、その機関が提供する「保障」を求めて人々が集積し、都市の形成が促進される。

2-B. 都市住民が暴動を起こすと、支配の拠点となる機関が破壊される危険があるため、権力は、疫病・災害・飢餓など都市問題の解決を外部に優先し、住民に権力の存在を「正統化」せることで、都市の解体を抑制している。

(1) 多国籍企業などの経済権力が、輸送・通信網の中核となる地域に、取引の拠点を集積させると、資金

の高い雇用を求めて、農村から大量の余剰労働力が流入する。しかし、多くの労働者は、賃金の低い都市雑業への就労を余儀なくされる。

- (a) 日本など先進国の大企業は、新たな資本投資を抑えて、集積の利益を高めるため、また低廉な労働力を安定して確保するために、発展途上国の主座都市：マニラへ集中的に進出している（機関形成）。
 - (b) 主座都市に進出した企業の雇用力には限界があるため、マニラのスラム人口は、フォーマル部門の隙間でインフォーマル部門を拡充し、最低水準の生活を自ら確保すると（保障）同時に、企業は、彼らのフォーマル部門への参入を制限し（支配）、低廉な労働力としてプールしようとしている。
- (2) 中央政府などの政治権力が、ナショナリズムを鼓舞できる地域に、国家の拠点を移転させると、未開の居住地を求めて、大都市から大量の余剰人口が流入する。しかし多くの国民は、都心から離れた周縁地域への居住を余儀なくされる。
 - (a) ブラジル政府は、新政権の工業化政策を実現するために、また国民に将来の国家目標を認知させるために、国土の中心に壮大な新首都：ブラジリアを建設した（機関形成）。
 - (b) 政府機関が集積する首都内部に低所得者層が流入すると、治安が悪化する恐れがあるため、政府はブラジリアを直轄統治し、郊外に移住者のための衛星都市を計画すると（保障）同時に、彼らを首都から隔離し（支配）、国家全体に影響を与える政治変動を抑制しようとしている。
 - (3) 新興宗教などの宗教権力が、他信徒との交流が遮断される地域に、信仰の拠点を建設すると、精神的な安住の地を求めて、世界から大量の信徒が流入する。しかし、信徒の道德観は、近代国家の確立過程で、統治者の政治的価値への同化を余儀なくされる。
 - (a) モルモン教は、プロテスタントの迫害から逃れ、教義に基づく独自の精神世界を実現するために、フロンティアの外に、信徒の自治コミュニティ：ソルトレイクシティを開拓した（機関形成）。
 - (b) 合衆国では政教分離を確立しない限り、宗教と政府の対立が避けられないため、モルモン教はソルトレイクシティを世俗化させることで、信者に信仰生活の場を提供すると（保障）同時に、彼らにWASP的な価値を受容させることで（支配）、国家権力の弾圧から逃れようとしている。
 - (4) 食糧を自給できない都市の食糧は、国家がその供給を保障しているため、都市住民は農村住民よりも飢餓の危険が少ない。
 - (a) モスクワなどの大都市は、ソ連政府の計画に基づいて工業製品を製造し、それを農村に供給する一方で、都市労働者が必要とする食糧は、ウクライナなどの穀倉地帯から強制的に調達することで、飢餓の発生が抑制されている（都市の優先保障）。
 - (b) ソ連政府は、都市の飢餓問題を解決し、都市住民の不満を逸らすことで、共産党の一党支配体制を確立してきた（正統化）。

Ⅲ. 日本の都市、とりわけ東京は、他の先進国の都市と比べて政治・経済・情報の各権力が一極集中しているところに特質がある。

- 3-A. 日本社会では、政治権力が他の権力よりも優位にあるため、その他の権力機関、あるいは、それらの機関から保障を受けようとする人々は、政治権力が集中する東京へ集積する傾向にある（政治権力の優位性）。
- 3-B. 政治権力の支持基盤は、組織の結束力が強い農村にあるため、日本の社会問題は、都市よりも農村で優先的に解消される傾向にある（農村の優先保障）。

5. 単元の展開

| 展開 | 教師による指示・発問 | 教授学習活動 | 教材 | 生徒から引き出したい知識 |
|-----|--|--|-------------------|--|
| 導入部 | <p>○きみたちが都市に魅かれるのは、どんなところか？</p> <p>○都市は本当に魅力的なところか？</p> <p>神戸という都市を襲った「阪神大震災」を事例に考えてみよう。</p> <p>・大震災によって、神戸はどのような被害を受けたか？（一次現象）</p> <p>・その結果、神戸市には、どのような事態が生じたか？（二次現象）</p> | <p>T：発問する</p> <p>P：答える</p> <p>T：発問する</p> <p>P：予想する</p> <p>T：発問する</p> <p>資料提示</p> <p>P：答える</p> <p>T：発問する</p> <p>資料提示</p> <p>P：答える</p> | <p>①</p> <p>②</p> | <p>・便利、就職口が多い、おしゃれな店が多い、など。</p> <p>・わからない。</p> <p>・家が倒壊し、多くの市民が避難所生活を強いられた。</p> <p>・ライフライン（上下水道/ガス/電気/電話）が寸断された。</p> <p>・周辺の都市と結ぶ高速道路や地下鉄、鉄道が寸断された。</p> <p>・長田区を中心に、火災の被害が拡大した（類焼した）。</p> <p>・トイレなど、避難所の生活環境が悪化した。</p> <p>・日々の食糧が不足した。</p> |

| | | | |
|--|---|--|---|
| <p>「課題把握」</p> | <p>・なぜ、そのような事態が生じたのか？</p> <p>・これは、現代の神戸に限られたことか？過去における都市の実態をみてみよう。</p> <p>・都市のもつ危険性について、まとめよう。</p> | <p>T：発問する P：答える</p> <p>T：発問する T：説明する</p> <p>T：説明する</p> <p>T：説明する</p> <p>T：発問する P：答える</p> | <p>・都市には住宅が密集しているため、一度火災が起こると、飛び火などによって被害が拡大しやすい。</p> <p>・都市には狭い範囲に多くの人口が住んでいるため、上下水道が機能しなくなると、衛生が急激に悪化する。</p> <p>・都市は食糧を生産せず（神戸は商業、港湾都市）、その供給を周辺に依存しているため、輸送網が麻痺すると、食料が途絶える。</p> <p>③ 産業革命後のイギリスの都市では、都市衛生が悪化し、赤痢やコレラなどの疫病が蔓延した。</p> <p>④ 家屋が密集する江戸では、「明暦の大火」で市中の6割が消失し、約10万人が死亡した。</p> <p>⑤ 第二次世界大戦中のレーニングラードでは、都市がドイツ軍に包囲され、63万人の餓死者が出た。</p> <p>・狭い範囲に多くの人々が集住している都市は、潜在的に、火災時の類焼、疫病の蔓延、飢餓の発生、という問題を抱える。神戸では、震災によってその危険性が露呈した。</p> |
| <p>「MMQ提示」</p> | <p>○世界の人々は、都市と農村のどちらに魅力を感じているか？</p> <p>●都市には潜在的危険性があるにもかかわらず、なぜ人々は都市に流入し、そこに定住するのだろうか？ 展開部Iでは、マニラ、ブラジリア、ソルトレイクシティの各都市を事例に、展開部IIでは、モスクワを事例に、考えてみよう。</p> | <p>T：発問する P：答える</p> <p>T：発問する P：予想する</p> | <p>⑥ 世界の都市人口は、歴史的に増加の傾向にある。</p> <p>・農村人口の割合は、歴史的に低下の傾向にある。</p> <p>・わからない。都市には、危険性を越えて、人々を引き付ける（権）力があるのではないか。</p> <p>・なぜ都市が建設され、そこに人が定住するのか、「都市形成の論理（I）」と、なぜ都市は、今日では潜在的危険性が解放され、農村より魅力ある社会になっているのか、「都市非解体の論理（II）」が解明されないといけない。</p> |
| <p>「導入」</p> | <p>・日本の企業は、フィリピンのどこに進出しているか？</p> <p>・マニラには、どのような人々が住んでいるか？</p> <p>●なぜマニラには、日本企業などの大資本が集積しているのに、スラムは解消されず、スラム人口は増加しているのだろうか？</p> | <p>T：発問する 資料提示 P：答える</p> <p>T：発問する 資料提示 P：答える</p> <p>T：発問する P：予想する</p> | <p>① フィリピンには、三菱や丸紅、住友などの商社、サンヨーや本田、日立などのメーカーが数多く進出しているが、そのほとんどはマニラに集中している。</p> <p>② 1985年現在、マニラには約700万の人々が住んでいるが、その38%（約270万）人は不法居住者であり、その数は増加している。マニラの中心街はスラムによって占拠されており、トンド地区はアジア最大のスラムとして知られる。</p> <p>・わからない。日本などの大企業が数多く進出していれば、それだけ仕事は多く、スラムは次第に解消されるのではないか？</p> |
| <p>「展開部I」</p> <p>「展開部II」</p> <p>「ト」</p> <p>「1」</p> | <p>◎なぜ大企業は、マニラにばかり、進出するのか？</p> <p>○なぜ日本企業は、マニラに支社を立地させるのか？</p> <p>・マニラは、どのような都市か？</p> <p>・なぜ商社のみならず、メーカーも、マニラに立地するのか？</p> <p>○なぜ日本企業は、フィリピンの他の輸出加工区には分散せず、マニラにだけ集積するのか？</p> <p>・縦軸に人口規模、横軸に人口順位を取り、フィリピンの都市人口をグラフ化せよ。</p> <p>・なぜマニラだけが、他の都市とは隔絶した人口規模を誇る都市にまで成長したのか（なぜ主座都市になったのか）？</p> <p>・マニラだけが成長したことは、フィリピン全体に、どのような結果を引き起こしたか？</p> <p>○なぜ大企業は、マニラにばかり、進出するのか？まとめよう。</p> | <p>T：発問する P：予想する</p> <p>T：発問する T：発問する P：予想する</p> <p>T：発問する 資料提示 P：答える</p> <p>T：発問する P：予想する</p> <p>T：指示する 資料提示 P：グラフをつくる</p> <p>T：発問する 資料提示 P：答える</p> <p>T：発問する P：答える</p> <p>T：発問する P：答える</p> <p>T：発問する P：答える</p> | <p>・マニラは、フィリピンの中心地だからではないか？</p> <p>③ 港湾都市のマニラは、国内の流通のみならず、海外との輸出入にも適した都市である。したがって、商社は、一般にマニラにその取引の拠点を置く。</p> <p>④ マニラとその周辺部は、フィリピン全土に点在する「工業団地」の1つで、進出した日系、欧米の企業は、フィリピン政府から、土地の租借権や税制面において優遇される。マニラは、製品や部品の輸出入にも有利である。</p> <p>・マニラには巨大なスラムがあるので、労働力となる余剰人口が多いからではないか？</p> <p>⑤  マニラはフィリピンで最も人口の多い都市（780万）であり、第2位のケソン（160万）と比べても隔絶した規模をほこる（主座都市）。</p> <p>⑥ マニラは、1571年にスペインに建設されて以来、フィリピン貿易の拠点であり、合衆国の統治下でも同様であった。宗主国は、交易拠点としてマニラを開発するため、港湾や道路、空港などのインフラを重点的に整備し、マニラは外国との交易がフィリピンで最も多い都市に成長した。</p> <p>・欧米資本の投資は、都市基盤が確立されたマニラばかりに集積し、それ以外の中小都市への投資は抑えられた。その結果、マニラへの企業の集積は、さらなる企業の集積を呼び、マニラと地方都市との経済格差は固定化された。</p> <p>・日本など先進国の大企業は、新たな資本投資を抑えて、集積の利益を高めるため、また低廉な労働力を安定して確保するために、発展途上国の主座都市：マニラへ集中的に進出している（機関形成）。</p> |

◎なぜマニラには多くの大企業が進出しているのに、スラムは解消しないのか？

T: 発問する
資料提示

○なぜ劣悪な居住環境のスラムで、人口が増大しているのか？
・スラムには、どのような人々が居住しているか？

T: 発問する
P: 予想する
T: 発問する
資料提示
P: 答える
T: 発問する
資料提示
P: 答える

・なぜ彼らは、マニラにやってくるのか？

・マニラにやってきた結果、彼らはどうなったか？ 目的を達成できたか？

T: 発問する
資料提示
P: 答える

○必ずしも雇用や居住の条件は良くないのに、なぜ農村からの流入者は、スラムに定住するのか？
・なぜスラム人口は、農村に帰らないのか？

T: 発問する
P: 予想する
T: 発問する
資料提示
P: 答える

・なぜスラム人口は、雇用条件のもっと良い、フォーマル部門に就労しないのか？

T: 発問する
資料提示
P: 答える

・なぜマニラ政府は、都市環境を悪化させているスラムを排除しないのか？

T: 発問する
資料提示
P: 答える

○なぜマニラには多くの大企業が進出しているのに、スラムは解消しないのか？まともよう。

T: 発問する
P: 答える

◎なぜマニラには、日本企業などの大資本が集積しているのに、スラムは解消されず、スラム人口は増加しているのだろうか？

T: 発問する
P: 答える
T: 図示する

○ラテンアメリカの交易拠点には、人口が集積しているか？

T: 発問する
P: 予想する

・メキシコシティの場合は、どうか？

T: 発問する
資料提示
P: 答える

・なぜメキシコシティへの人口集中は、解消されないのか？

T: 発問する
資料提示
P: 答える

・ブラジリアとは、どのような都市か？

T: 発問する
資料提示
P: 答える

・ブラジリアの建設は、どのように評価されているか？

T: 説明する
資料提示

⑦ ・スラムは、トイレや上下水道は整備されず、家も粗末な掘っ立て小屋であり、衛生・居住環境ともに劣悪である。

・わからない。スラムには何か魅力があるのではないか？

⑧ ・マニラには、かつて、サマール州やレイテ州などの農村に居住していた最下層の農民（小作人）が流入している。

⑨ ・マニラに流入する人々のうち、78%の人々が少しでも好条件の就業の場を求めて、43%が先住する家族に引き寄せられてマニラにやってくる。多くはそのままスラムに入る。

⑩ ・地方の農村からマニラに流入してきた人々の多くは、都市雑業（廃品回収、行商、露天商、臨時雇いの労働者）に従事する。彼らは低賃金のために正規に家を借りることが出来ず、不法に土地を占拠し、そこに小屋を建てて生活する。

⑪ ・都市雑業など、都市の生産力に全く貢献しない経済活動を「インフォーマル部門（平均年収約2000ペソ）」と呼ぶ。一方、日本や欧米の企業など、都市の生産力に貢献し、政府によって正規に把握されている経済活動を「フォーマル部門（平均年収約8000ペソ）」と呼ぶ。

・スラムに居住する方が、農村よりもましなのではないか？

⑫ ・マニラに流入した農民は、農村の余剰労働力であり、農村に帰っても土地も仕事もなく、生計を立てるにはスラムに居住し、都市雑業にでも携わるしかない。

⑬ ・インフォーマル部門では一定の現金収入が得られるため、農村よりもスラムの方が、最低水準の生活が保証される。

⑭ ・マニラには多くの企業が進出しているが、インフォーマル部門と比較してフォーマル部門の雇用は圧倒的に少ない。

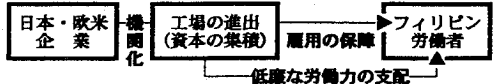
⑮ ・雇用があっても、賃金水準の高い職業に就労しようとすると、質の高い（中等）教育を受けていなければならない。スラムの居住者は教育年数が少なく、また特殊な技能も習得していないため、フォーマル部門に参入するのは難しい。

⑯ ・東南アジアのスラムは、勤労意欲が高く、秩序も維持されているため、欧米都市の「絶望のスラム」に対して「希望のスラム」と呼ばれる。従って、排除する必要性は低い。

⑰ ・スラムには低廉な労働力が大量に、しかも秩序よくリザーブされており、フォーマル部門は、雇用の安全弁として、インフォーマル部門を利用することができる。

・主座都市の企業の雇用能力には限界があるため、マニラのスラム人口は、フォーマル部門の隙間でインフォーマル部門を拡充し、最低水準の生活を自ら確保する（保障）と同時に、企業は彼らのフォーマル部門への参入を制限し（支配）低廉な労働力としてアールしようとしている。

・日本企業は、新たな資本投資を抑えて、集積の利益を高めるため、フィリピンの主座都市であるマニラに進出した。インフォーマル部門を形成しているスラムでは、少なくとも農村以上の生活水準が保障されるため、マニラの人口は都市の生産力に関係なく、加速度的に増加している。



・東南アジア同様かつて植民地支配を受けたラテンアメリカならば、とりわけ交易拠点の成長が著しいのではないか。

⑱ ・新大陸におけるスペインの交易拠点であったメキシコシティは、今日でもメキシコの主座都市（1700万人）であり、2位のグアダハラ（160万人）を大きく引き離している。

⑲ ・メキシコシティの人口の40%はスラム人口である。農村との経済格差が縮小しない限り、流入人口は途絶えない。

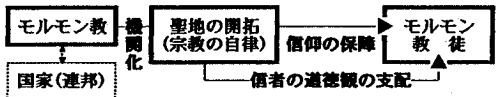
① ・ブラジルの首都ブラジリアは、リオデジャネイロから内陸へ約900km、標高1200mの高原地帯にある。ブラジリア以前はリオデジャネイロに首都が置かれていたが、1957年に就任したクビチェック大統領のリーダーシップによって新首都の建設が計画され、3年後にはブラジリアが完成した。

② ・1957年当時ブラジル政府は2億8600万ドルの財政赤字を抱えており、また資財を内陸の建設予定地まで空輸するような無謀な計画だったことから「狂気の沙汰」と評された。

| | | | | | | |
|------------------------------------|------------------------------------|---|---|---|--|---|
| 展 開 部 展 開 I (1) | 「導 入」 | ・新首都として建設されたブラジリアには、どのくらいの人口が住んでいるか？ | T：発問する 資料提示 P：答える | ③ | ・1956年には無人の地であったブラジル連邦区の人口は、首都が完成した1960年には14万人、その後70年には56万人、80年には120万人、86年には160万人と急増している。ブラジリアは、ブラジルで最も人口増加率の高い地域である。 | |
| | | ◎なぜブラジル政府は、内陸の不便な高原地帯に首都を建設したにも関わらず、首都の人口は増加しているのだろうか？ | T：発問する P：予想する | | ・わからない。 ・沿岸部の人口を分散させようとしたのではないか。 | |
| | 展 開 部 展 開 I (1) | ◎なぜ政府は、赤字財政のなか、新しく首都を建設したのか？ ○なぜブラジル政府は、既存の都市へ遷都せず、新しく首都を建設したのか？ ・なぜ旧首都のリオデジャネイロでは、だめだったのか？ | T：発問する P：予想する T：発問する P：予想する | | ・前首都のリオデジャネイロの首都機能が拡大する一方で、新たな用地を確保するのに限界が生じたのではないか。 | |
| | | | T：発問する 資料提示 P：答える | ④ | ・リオは、山を背にした沿岸地帯にあり、人口の収容能力や国防において問題視された。首都の移転は植民地時代から課題とされており、独立後に制定された共和国憲法（1891年）にも、首都を移転すべきことが明文化された。 | |
| | | ・なぜ首都の移転は、長年実現されず、ほっておかれたのか？ | T：発問する 資料提示 P：答える | ⑤ | ・政府は独立後、民族産業の保護を政策に掲げており、莫大な資金と高度な技術が必要とされ、外国企業を受け入れない限り実現できない首都の移転は、先延ばしされてきた。 | |
| | | ・なぜクビチェック政権は、先延ばしされてきた首都の移転を、実現しようとしたのか？ | T：発問する 資料提示 P：答える | ⑥ | ・クビチェックは、短期間（「50年を5年で！」）に国内産業を重工業化し、また国内の運輸通信網を整備するために、外資を導入することを決断した（開発計画「メタス」）。彼は、建国以来の懸案だった首都の移転をブラジリアの建設として具体化することで、それを起爆剤に工業需要を高め、新首都をインフラ整備の拠点にしようとした。 | |
| | | ○なぜ新首都建設の候補地として、内陸の不便な高原地帯が選ばれたのか？ ・実際に建設された首都は、どのようなものか？都市景観は、何に見えるか？ | T：発問する P：予想する T：発問する 資料提示 P：答える | ⑦ | ・開発の進んだ沿岸部と開発の遅れた内陸部との地域格差を是正しようとしたのではないか。 ・都市景観は、飛びたとうとするジェット機を模している。首都は世界的建築家のルシオ＝コスタ、オスカー＝ニーマイヤーによって設計された壮大なもので、面積は5,814km ² （東京の約2.5倍）あった。都心には、超近代的にデザインされた大統領府、最高裁判所、国家議事堂、連邦区庁、外国大使館、公務員住宅などが、計画的に配置されている。 | |
| | | ・なぜこれほど壮大な建築物を、誰も住んでいない内陸に建設したのか？ | T：発問する 資料提示 P：答える | ⑧ | ・ブラジル政府は、未開発で残されたきた内陸に、象徴的な施設を数多く建設することで、将来に向けての開発の可能性や、ブラジルの経済力を国内外に顕示しようとした。 | |
| | | ・なぜクビチェック政権は、経済性を完全に無視してまで、ナショナリズムを高揚させようとしたのか？ | T：発問する 資料提示 T：説明する | ⑨ | ・メタスは、民族産業の保護を放棄し、外国企業を積極的に導入する政策であった。そこで政府は、外資導入に反対する財界や国民の不満（「売国奴」批判）をかわすために、一方ではナショナリズムを高めるような新首都を計画した。 | |
| | | ○なぜ政府は、赤字財政なのか、新しく首都を建設したのか？まとめよう。 | T：発問する P：答える | | ・ブラジル政府は、新政権の工業化政策を実現するために、また国民に将来の国家目標を認知させるために、国土の中心に壮大な新首都：ブラジリアを建設した（機関形成）。 | |
| 展 開 部 展 開 II (2) | 「導 入」 | ◎なぜ首都機能を移転させただけのブラジリアに、今日なお多くの人々が流入しているのか？ ○なぜ公務員は40万人しかいないのに、160万もの人々がブラジリアに定住しているのか？ ・公務員以外でブラジリアに住んでいるのは、どんな人々か？ | T：発問する P：予想する T：発問する P：予想する T：発問する P：答える | | ・政府機関で働く公務員が増加しているのではないかと？ ・公務員以外に、どのような人々が住んでいるのか解明されないと、わからない。 | |
| | | ・なぜ建設労働者は、元の居住地に戻らなかったのか？ | T：発問する P：答える | ⑩ | ・ブラジリアの建設は、短期間で首都を建設する大工事だったため、全国から建設労働者が集められた。その後もインフラ整備のため、首都には多くの労働者が流入している。 | |
| | 展 開 部 展 開 II (2) | ◎なぜブラジル政府は、衛星都市を建設してまで、そこに建設労働者を定住させようとするのか？ ・衛星都市に住居できない労働者は、どうなったのか？ | T：発問する P：予想する T：発問する 資料提示 P：答える | | ⑪ | ・ブラジル政府は、建設労働者の増加に備え、あらかじめ都心から15～30km離れた地域に11の衛星都市を建設し、そこに彼らを定住させた。建設労働者も、農村や都市のスラムに戻るよりも、内陸の衛星都市の方がましと考えた。 |
| | | | T：発問する 資料提示 P：答える | ⑫ | ・社会的に地位の低い労働者を、保護しようとしたのではないかと。 | |
| | | ・なぜブラジル政府は、費用のからないスラムを排除する一方で、莫大な費用のかかる衛星都市を建設しようとするのか？ | T：発問する 資料提示 P：答える | ⑬ | ・衛星都市から溢れた労働者は都心の周辺部にスラムを形成した。しかしブラジル政府はヌクレオ＝バンティランテ地区を公認した以外は、全てのスラムを強制的に撤去した。 | |
| | | | | ⑭ | ・ブラジル政府は、リオに首都を置いていた時の経験から、首都機能が集積した都心に、一度、低所得者のスラムが形成されると、それを排除することは難しいと判断した。政府は、都心には公務員を定住させ、都心から遠く離れた | |

| | | | | | |
|-------------|---------------------------------|-----------------|--|--|--|
| 展 開 部 | I （ パ ー ト 2 ） | 「終 結」 | <ul style="list-style-type: none"> なぜブラジリアの行政には、労働者など、首都で多数を占める都市住民の立場が反映されないのか？ ○なぜ首都機能を移転させただけのブラジリアに、今日なお多くの人々が流入しているのか？まとめよう。 | <p>T：発問する 資料提示 P：答える</p> <p>T：発問する P：答える</p> | <p>郊外には衛星都市を建設し、そこに労働者を分散して居住させることで、首都の治安を維持しようとした。</p> <p>⑮ ブラジル政府は、ブラジリアを「連邦区」として指定し、自治権を制限（知事は大統領の任命）している。したがって、首都行政には、中央政府の意向が反映しやすい。</p> <p>・政府機関が集積する首都内部に低所得者層が流入すると、治安が悪化する恐れがあるため、政府はブラジリアを直轄統治し、郊外には移住者のための衛星都市を計画する（保障）と同時に、彼らを首都から隔離し（支配）、国家全体に影響を与える政治変動を抑制しようとしている。</p> |
| | | | <ul style="list-style-type: none"> ●なぜブラジル政府は、内陸の不便な高原地帯に首都を建設したにも関わらず、首都の人口は増加しているのだろうか？ ○近年の新興独立国は、どのような首都を建設しているか？ ・ナイジェリアの場合はどうか？ ・なぜナイジェリアは、内陸に首都を移転させたのか？ | <p>T：発問する P：答える</p> <p>T：図示する</p> <p>T：発問する P：予想する</p> <p>T：発問する 資料提示 T：説明する</p> <p>T：発問する 資料提示 P：答える</p> | <p>・政府は、経済開発と国家意識の高揚という政策を同時に実現するために、国内で開発が遅れた内陸に新首都を建設した。政府は大量の建設労働者を雇用し、彼らに居住地を提供したため、ブラジリアには大量の低所得者層が流入したが、治安維持のために徹底した住み分けが行われている。</p> <div data-bbox="740 502 1234 598" style="text-align: center;"> <p>ブラジル政府 → 首都の建設 (国家の象徴) → 居住の保障 → ブラジル国民</p> <p>国民の政治行動の支配</p> </div> <p>・とりわけ新興独立国は、国民にナショナリズムを形成するために、象徴的な首都を建設しているのではないかと？</p> <p>⑯ ナイジェリアは沿岸部の旧首都ラゴスから約500km内陸のサバナ地帯に、新首都アブジャを建設した。現在の人口は25万、将来的には320万まで増大すると予測されている。</p> <p>⑰ ナイジェリアは、部族間の対立を解消し、部族を国民として統合するために、それぞれの居住地の中間地点に新首都を建設し、それを国家統合のシンボルしようとした。</p> |
| 展 開 部 | I （ パ ー ト 3 ） | 「展 開 (1)」 | <ul style="list-style-type: none"> ・ソルトレイクシティとは、どんな都市か？ ・ソルトレイクシティには、どんな人々が住んでいるか ●なぜモルモン教は、人口の密集地から遠く離れた砂漠に聖地を建設したにも関わらず、聖地の人口は増加しているのか？ | <p>T：発問する P：答える</p> <p>T：発問する P：答える</p> <p>T：発問する P：予想する</p> <p>T：発問する 資料提示 P：答える</p> | <p>① ・ソルトレイクシティは、ロッキー山脈の麓の砂漠地帯に位置し、人口16万を擁するユタ州の州都である。最も近い大都市まで600km、太平洋岸まで1,000km離れている。</p> <p>② ・ソルトレイクシティは、プリガム＝ヤングがモルモン教徒を引き連れ、内陸へ移住する過程で到達した同教の聖地である。当時はまだフロンティアの外の未開地であった。</p> <p>③ ・ソルトレイクシティはカリフォルニア州からの流入人口で、1980年代に17%人口が増えた。同市は一時期、人口の80%がモルモン教徒であったが、エレクトロニクス産業、鉄鋼、化学企業関連の労働者が増えたため、近年では人口に占めるモルモン教徒の割合は、50%を割っている。</p> <p>・わからない。新しく工業団地ができたからではないかと？</p> |
| | | | <ul style="list-style-type: none"> ○なぜモルモン教は、布教に不便な内陸に、聖地を建設したのか？ ○なぜモルモン教は、異教徒と共存せず、社会から遮断された地域にコミュニティを開拓したのか？ ・モルモン教は、どんな宗教か？ 1) 教義 2) 歴史 3) 生活 ・なぜモルモン教は、同じキリスト教のプロテスタントから迫害されたのか？ ・なぜモルモン教徒のコミュニティが、市民を守るべき軍隊や警察から攻撃されたのか？ ・なぜモルモン教は、異教徒と共存せず、社会から遮断された地域に自分たちのコミュニティを開拓したのか？ | <p>T：発問する P：予想する</p> <p>T：発問する P：予想する</p> <p>T：発問する 資料提示 P：答える</p> <p>T：発問する P：答える</p> <p>T：発問する P：答える</p> <p>T：発問する P：答える</p> | <p>・布教する気がなかったのではないかと？</p> <p>・もともと閉鎖的な宗教だったのではないかと？</p> <p>④ ・モルモン教は、排他的な選民思想と一夫多妻制を独自の教義とし、モルモン教徒こそが「神の国」の建設を目指し、また実現できると考えた。</p> <p>⑤ ・モルモン教徒は、1830年の設立以来、プロテスタントから迫害された。オハイオでは州兵が動員され、モルモン教徒との間で戦闘が行なわれた（モルモン戦争）。ミズーリでは教徒の財産が剥脱されたり、官憲に投獄されたりした。</p> <p>⑥ ・教会の設立当初は、ソルトレイクシティの民事上、刑事上の諸問題はすべて教会の最高委員会によって律せられ、特に放浪、窃盗、風紀紊乱、姦通は厳しく罰せられた。</p> <p>⑦ ・モルモン教徒の選民意識や蓄財、とりわけ一夫多妻制は、プロテスタントの教義とは相容れず、モルモン教は、異質な教義をもつ分派集団（セクト）として異端視された。</p> <p>・合衆国の指導者は、おもにWASPによって支持されており、彼らは公約に掲げたプロテスタントの主義主張を、軍隊や警察の強制力をもって実現しようとした。</p> <p>・モルモン教の独自の教義は、合衆国で正統派とみなされるプロテスタントの反感を買った。そこでモルモン教徒は、迫害を受けることなく、教義を実現できる場所を求めて西部の不毛の地に、自治コミュニティを形成した。</p> |

| | | | | | | |
|--|---|--|---|---|-----------------------------|---|
| 展 開 部 I 展 開 パ ー ト 3 () | 「展開(1)」 | ○なぜ何もない不毛の地が、モルモン教にとって「神の国」なのか？ ・ソルトレイクシティーは、どのような都市景観か？ | T: 発問する P: 予想する T: 発問する 資料提示 P: 答える | ⑧ | ・ここには何らかの、宗教的神秘性があったのではないか。 | |
| | | ・なぜソルトレイクシティーは、シオンの町を模倣したのか？ | T: 発問する 資料提示 P: 答える | | ⑨ | ・塩湖などの自然景観は、ヤングにシオンを彷彿させた。 ・モルモン教徒は、不毛の地を人工的に「神の国」へ改造するため、シオンを徹底して真似る都市計画を実施した。街路は基盤目に区画され、市街地には大聖堂やヤング記念碑が建設されるなど、壮麗で整然とした都市になっている。 |
| | ○なぜモルモン教は、布教に不便な内陸の奥地に、聖地を建設したのか？まともよう。 | T: 発問する P: 答える | | | ⑩ | ・モルモン教の指導者らは、不毛の地に神聖さを与え、そこを信者にとっての「神の王国」として認知させるには、キリスト教の聖地であるシオンを模倣し、さらにはモルモン教独自のシンボルを建設することが、効果的と考えた。 |
| | ◎なぜ排他的なモルモン教の聖地に今日では多くの異教徒が定住しているのか？ ○モルモン教を異端視してきた人々が、なぜソルトレイクシティーで彼らと共存するようになったか？ ・なぜ合衆国社会と遮断されていたソルトレイクシティーに、異教徒が流入し始めたのか？ | T: 発問する P: 予想する T: 発問する P: 予想する T: 発問する 資料提示 P: 答える | | | ⑪ | ・モルモン教は、プロテスタントの迫害から逃れ、教義に基づく独自の精神世界を実現するために、フロンティアの外に信徒の自治コミュニティ：ソルトレイクシティーを開拓した（機関形成）。 |
| | ・フロンティアの消滅は、モルモン教に、どのような結果をもたらしたか？ | T: 発問する 資料提示 P: 答える | | | ⑫ | ・主流派のプロテスタントと少数派のモルモン教徒が仲直りしたのではないか。 |
| | ○なぜモルモン教徒が、ソルトレイクシティーの内部で独自の信仰をもつことが批判されるのか？ ・なぜモルモン教は、信仰のアイデンティティーたる一夫多妻制を放棄したのか？ | T: 発問する P: 予想する T: 発問する 資料提示 P: 答える | | | ⑬ | ・1869年、ユタで東西の大陸横断鉄道が繋がった結果、それまで外界から遮断されていたソルトレイクシティーも、東部市場に取り込まれようになった。しかし、モルモン教徒は、教義に基づき、自給自足経済を継続しようとした。 |
| | ・なぜモルモン教を黙認していた連邦政府が、モルモン教を強硬に弾圧し始めたのか？ | T: 発問する 資料提示 P: 答える | | | ⑭ | ・ソルトレイクシティーの排他性は、全米に知られるところとなり、連邦全体の問題として共有されるようになった。例えばリンカーンは、一夫多妻制と奴隷性を「双子の野蛮主義の遺物」として批判し、それを選挙運動に利用した。 |
| | ・教義の世俗化は、ソルトレイクシティーに、どのような結果をもたらしたか？ | T: 発問する P: 答える | | | ⑮ | ・周りに迷惑をかけず、自分たちのコミュニティで信仰を続けるだけなら、セクトの存在も許されるのではないか。 |
| | ○なぜ排他的なモルモン教の聖地に今日では多くの異教徒が定住しているのか？まともよう。 | T: 発問する P: 答える | | | ⑯ | ・連邦議会は、一夫多妻制の実践者の公民権を停止し、教会の財産を没収する「エドモンド・タッカー法」(1887年)を通過させ、連邦政府はユタに軍を派遣してでもそれを遵守させようとした。モルモン教は、信仰の場を失うことを恐れて、一夫多妻制の放棄を表明した(1890年)。 |
| | 「終結」 | ◎なぜモルモン教は、人口の密集地から遠く離れた砂漠に聖地を建設したにも関わらず、聖地の人口は増加しているのか？ | T: 発問する P: 答える T: 図示する | | | ⑰ |
| ○世界の多くの人々が信仰する普遍宗教は、はじめはどこに、信仰の拠点を置いたか？ ・イスラム教の場合は、どうか？ ・なぜメディナは、異教徒にとって、開かれた聖地とはならないのか？ | | T: 発問する P: 予想する T: 発問する 資料提示 P: 答える T: 発問する 資料提示 P: 答える | | | ⑱ | ・治安の良かったソルトレイクシティーには、企業や大学など多くの異教徒が流入し、彼らと共存するようになった。 |



| | | | |
|---|--|---|---|
| <p>展開部 I のまとめ</p> | <p>○なぜ人々は都市に流入し、そこへ定住するのか、なぜ権力は、都市を必要とするのか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・マニラの場合は、どうか？ ・ブラジリアの場合は、どうか？ ・ソルトレイクシティーの場合はどうか <p>◎なぜ都市は、潜在的に多くの危険を抱えるにも関わらず、多くの人々がそこに引き付けられ、定住しているのか？まとめよう</p> | <p>T：発問する P：予想する</p> <p>T：モデルAを 図示し、説明する</p> <p>T：モデルAを 図示し、説明する</p> <p>T：モデルAを 図示し、説明する</p> <p>T：発問する P：議論する</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・人々は、権力が設置する「中枢機関」の「保障」に引き付けられ、一箇所に定住するが、一方で人々は、暗黙裏に権力の維持拡大のために「支配」されているのではないか？ ・多国籍企業などの経済権力が、輸送通信網の中核となる地域に取引の拠点を集積させると、賃金の高い雇用を求めて農村から大量の余剰労働力が流入する。しかし多くの労働者は、賃金の低い都市雑業への就労を余儀なくされる。 ・中央政府などの政治権力が、ナショナリズムを鼓舞できる地域に国家の拠点を移転させると、未開の居住地を求めて大都市から大量の余剰人口が流入する。しかし多くの国民は、都心から離れた周縁地域への居住を余儀なくされる。 ・新興宗教などの宗教権力が、他信徒との交流が遮断される地域に信仰の拠点を建設すると、精神的な安住の地を求めて、世界から大量の信徒が流入する。しかし信徒の道徳観は、近代国家の形成過程で、統治者の政治的価値への同化を余儀なくされる。 ・政治、経済、宗教の各権力が、市場（労働者）、国家（国民）信仰共同体（道徳観）、それぞれを「支配」する「中枢機関」を設置すると、その機関が提供する「保障」を求めて人々が集積し、都市の形成が促進される。 |
| <p>「導入」</p> <p>展開部 II</p> <p>「展開」</p> <p>ト (1)</p> <p>4</p> | <p>○農村で飢饉が起こると、食糧を自給できない都市は、どうなるだろう？</p> <p>◎穀倉地帯のウクライナで大量の餓死者が発生していたとき、なぜ大都市のモスクワやレニングラードでは飢饉が発生しなかったのか？</p> <p>◎なぜ飢饉が、食糧を生産する農村で起こるのか？</p> <p>○なぜ穀倉地帯のウクライナで、飢饉が起こったのか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当時の都市の状況は？ ・当時の農村の状況は？ ・なぜウクライナで飢饉が発生したのか？まとめよう。 <p>○なぜ農民は国家の無理な食糧調達に、抵抗しなかったのか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スターリンは食糧調達のためにどのような計画を立てたか？ ・なぜ農民は、農業の集団化を拒否しなかったのか？ ・なぜ農民は、食糧のある都市へ逃げ込まないのか？ <p>○なぜ飢饉が、食糧を生産する農村で起こったのか？まとめよう。</p> | <p>T：発問する P：予想する T：説明する</p> <p>T：発問する P：予想する</p> <p>T：発問する P：予想する T：発問する 資料提示 P：答える</p> <p>T：発問する 資料提示 P：答える</p> <p>T：発問する P：答える</p> <p>T：図示する</p> <p>T：発問する P：予想する T：発問する 資料提示 P：答える</p> <p>T：発問する 資料提示 P：答える</p> <p>T：発問する 資料提示 P：答える</p> <p>T：発問する P：答える</p> | <p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・飢えるであろう。 ・1932-33年の冬、旧ソ連のウクライナ地方では約650万にも人々が餓死したが、大都市のモスクワやレニングラードでは、ほとんど餓死者は出なかったという。 ・社会主義国家における都市と農村の関係を解明しないと、わからない。 <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・旱魃や洪水などの自然災害が起こったのではないかと。 <p>③</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スターリンは、世界で唯一の社会主義国家として、軍事力と経済力の増強を目指しており、1928年にはその達成目標を示した第1次五ヵ年計画が発表された。 <p>④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スターリンは、工業化の原資を得るため、大量の穀物を西欧諸国に輸出したので、都市にまわす食糧が不足した。工業化を推進したことで、都市には大量の労働者が集まりそこでは大量の食糧を消費するようになった。 <p>⑤</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当時、農作物の収穫高は停滞、あるいは下降気味で、ソ連政府は、都市の食糧不足を補うために設定した目標の調達量を集めることさえ、危うい状況だった。 <p>⑥</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1932年8月、スターリンは穀物の供出を故意に拒んだものを厳罰に処す旨の法令を出し、徹底的に食糧を収奪した。 ・同年冬、ウクライナの農村では、パンやジャガイモが急激に不足し、飢饉が拡大した。 <p>⑦</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スターリンは、都市に必要な食糧を確保するため、農村を飢えさせても、強制的に穀倉地帯から食糧を調達した。ソ連政府は、農村の余剰分()だけでなく、凶作時には、自給分()に食い込んでも都市の食糧を確保しようとした。 <p>⑧</p> <ul style="list-style-type: none"> ・拒否したり、都市へ逃げた農民もいるのではないかと。 <p>⑨</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スターリンは、地主で食糧をため込む富農（クラーク）の土地を取り上げ、それを小農・貧農に分配した（土地改革）。 ・スターリンは、中農・貧農にコルホーズ、ソフホーズへの加入を奨励し、生産された穀物を政府が直接管理できる体制を確立しようとした（農業の集団化）。 <p>⑩</p> <ul style="list-style-type: none"> ・拒否した農民は、強制収容所に送られた。止むを得ず受け入れた農民は、抵抗の意志を、国家の所有となった家畜を殺すことで示そうとしたが、家畜殺しは、逆に農民自身の食糧不足を招くことになり、抵抗は長続きしなかった。 ・スターリンは、農民が農業生産から離れ、都市へ流入することを恐れて、国内の人口移動を監視する国内旅券制度を導入し、農民を農村に縛り付けておこうとした。 ・モスクワなどの大都市は、ソ連政府の計画に基づいて、工業製品を製造し、それを農村に供給する一方で、都市労働者が必要とする食糧は、ウクライナなどの穀倉地帯から強制的に調達しようとしたため、農村でも飢饉が発生した。（都市の優先保障） |

| | | | | |
|----------|------|--|---|---|
| 展開部Ⅱ | 「展開」 | ◎なぜ国家は、農村を飢えさせてまで、都市に食糧を供給するのか？ ○なぜソ連政府は、モスクワなどの、都市の飢餓対策を優先するのか？ ・都市での食糧不足は、住民にどのような影響を与えるのか？ | T：発問する P：予想する T：発問する P：答える | ⑪ ・わからない。 ・都市での飢饉は、自然問題(=天災)ではなく、分配の不平等、すなわち、社会問題(=人災)とみなされるため、都市で食糧が不足すると、住民は暴動を起こす可能性がある。 ・政権の崩壊につながるからではないか。 |
| | | ○なぜソ連政府は、農村よりも、都市における暴動を恐れるのか？ ・都市での暴動には、どのような結果が予測されるか？「ロシア革命」を事例にみてみよう。 ・地方での暴動には、どのような結果が予測されるか？「太平天国の乱」を事例にみてみよう。 ・なぜ都市での暴動は、政権の崩壊につながるのか？ | T：発問する P：予想する T：資料提示 説明する T：資料提示 説明する T：発問する P：答える | |
| 「終結」 | 「ト」 | ○なぜ国家は、農村を飢えさせてまで、都市に食糧を供給するのか？ まとめよう。 | T：発問する P：答える | ⑭ ・ソ連政府は、都市の飢餓問題を解決し、都市住民の不満を逸らすことで、共産党の支配体制を確立しようとした。(正統化) ・ソ連政府は、穀倉地帯の農村から食糧を強制的に調達することで、都市住民が飢餓に陥ることを抑制しようとした。政府は、政権の崩壊に直結しかねない都市の暴動を牽制し、社会主義の国家体制を正統化するためにも、政府は農村に優先して、都市の食糧問題を解決する必要があった。 ・食糧を統制する国家機関や、輸送通信網が壊滅していた。 ・資本主義国は、ソ連のように政府が食糧を統制するのではなく、企業の自由な経済活動に委ねているのではないか。 ・EUは、農作物の輸入には輸入課徴金を課し、輸出には輸出補助金を出すことで、合衆国の安い穀物が流入するのを阻止したり、ヨーロッパ産穀物の競争力を高めたりしている。すなわち、EU各国は国際市場に積極的に介入することで農家を保護し、最低限の食糧を自給している。 ・国内の農家が壊滅すると、戦争で食糧輸入が途絶えた場合都市の食糧が確保できない危険がある。 |
| | | ◎穀倉地帯のウクライナで大量の餓死者が発生していたとき、なぜ大都市のモスクワやレニングラードでは飢餓が発生しなかったのか？ ・なぜ戦時中のレニングラードでは、大量の餓死者が出たのか？ ○先進資本主義国は、どのようにして都市の食糧を確保しているのか？ ・EUの場合はどうか？ ・なぜEUは、外国の安い農作物を輸入せず、税金を使ってまで農業を保護するのか？ | T：発問する P：答える T：発問する P：予想する T：発問する 資料表示 P：答える T：発問する P：答える | |
| 展開部Ⅱのまとめ | 「理」 | ○都市が抱える潜在的危険性には、食糧供給の確保以外にも、疫病の蔓延、災害時の被害拡大(類焼)があった。なぜ現代の大都市では、飢餓同様、これらの問題が深刻化することは、ほとんどないのか？ ◎なぜ都市は、潜在的に多くの危険を抱えるにも関わらず、解体することなく、多くの人々が定住しているのか？まとめよう | T：発問する P：予想する T：モデルBを 図示し、説明する T：発問する P：議論する | ⑮ ・近代国家の形成過程で、国家は、飢餓同様、都市問題を優先的に解決すべく、類焼や疫病対策(都市計画、都市衛生)を確立してきた。これら都市飢餓、都市計画、都市衛生の改善は、いずれも権力が都市住民の不満をそらすために、農村を犠牲にすることで、政策化したものである。 ・都市住民が暴動を起こすと、支配の拠点となる諸機関が破壊される危険があるため、権力は、疫病・災害・飢餓など都市問題の解決を外部に優先し、住民に権力の存在を「正統化」せることで、都市の解体を抑制している。 |
| | | ●都市には潜在的危険性があるにもかかわらず、なぜ人々は都市に流入し、そこに定住するのだろうか？ | T：発問する P：議論する | |
| 「理」 | 「論」 | ○日本でも諸外国と同じように、都市への人口集中がみられるか？ ・日本の都市人口の割合は、どうなっているか？ ・なぜ日本では、諸外国以上に、都市への過度な人口集中がみられるのか？ ・なぜ東京には、他の都市以上に様々な権力の機関が集積しているのか？ | T：発問する P：予想する T：発問する 資料提示 P：答える T：発問する 資料提示 P：答える T：発問する 資料提示 P：答える | ① ・諸外国と同じように、全人口に占める都市人口の割合は、農村よりも高いのではないか？ ② ・三大都市圏には、日本の全人口の約5割が集中している。特に東京圏には、人口の約3割が集中している。 ③ ・都市には、多くの雇用先や進学先が存在する。特に東京には、政治、経済、教育の各権力の中枢機関(政府の本省、企業の本社、大学、研究所など)が集積している。 ・日本の場合、政治権力が広大な許認可権と莫大な予算配分権を握っているため、他の権力の中枢機関も、政治機関が与える利権を求めて、また機関相互で交換される情報を求めて、首都の東京に集積してくる。 |

| | | | | |
|--------|------------|--|---|--|
| 終 結 | [理論吟味(2)] | ○日本でも諸外国と同じように、都市には農村よりも優先的に保障が与えられているか？ ・日本の都市問題の状況は、どうなっているか？ | T：発問する P：予想する | ④ 諸外国と同じように、都市問題は農村問題よりも優先的に解消されているのではないか？ ⑤ 都市への過度な人口集中は、住宅、交通、防災、ゴミ処理などの都市問題を引き起こしている。都市では、社会資本の整備が人口の増加に追い付いておらず、その結果、都市住民には「ゆとりのない生活」が強いられている。 ⑥ 日本の場合、政治権力に強い影響力をもっているのは、都市よりも農村の住民である。例えば、人口1人当たりの公共事業費は、都市よりも農村の方が圧倒的に高い。 |
| | | ・なぜ日本では、諸外国以上に、都市の社会資本の整備が遅れ、逆に農村のそれは充実しているのか？ ・なぜ日本では、都市以上に農村が、政治権力へ強い影響力を与えているのか？ | T：発問する 資料提示 P：答える T：発問する 資料提示 P：答える T：発問する 資料提示 P：答える | |
| 部 | [理論の修正・応用] | ○日本社会に固有な都市の特質は、何といえるか？まとめよう。 | T：発問する P：答える | ⑦ 日本社会では、政治権力が他の権力よりも優位にあるためその他の権力機関、あるいは、それらの機関から利益を受けようとする人々は、政治権力が集中する東京へ集積する傾向にある（政治権力の優位性）。 ⑧ 日本の政治権力の支持基盤は、組織の結束力の強い農村にあるため、社会問題は、都市よりも農村で優先的に解消される傾向にある（農村の優先保障）。 [予想される議論] ⑨ 第1の立場：やはり権力は、中枢機関が集積した都市を守り、権力を維持するため、農村から強制的に食糧を調達してでも、都市が飢餓に陥らないようにするのはないか。 ⑩ 第2の立場：日本では農村が強力な組織力をもつので、農村は最後まで食糧を出し惜しみするのではないか。農村に支持基盤をもつ政治権力は、農村に強制力を行使できないのではないか。 |
| | | ◎日本で食糧輸入が途絶えた場合、最後まで飢えないのは、どの地域と考えられるか？ ◎なぜその地域は、飢えないと考えられるのか？ | T：発問する P：自由に議論する T：発問する P：自由に議論する | |

【教材出典一覧】

[導入部]

- ①『報道写真全記録阪神大震災』朝日新聞社、1995年、pp.28-29, pp.34-35, pp.40-41, p.43, p.44.
- ②同上書、p.21, pp.42-43, p.43.
- ③角山栄『生活の世界史10産業革命と民衆』河出書房新社、1975年、p.171。角山栄・川北総編『路地裏の大英帝国』平凡社、1982年、p.97, p.111.
- ④『日本全史』講談社、1991年、pp.552-553.
- ⑤藤田弘夫『都市の論理』中央公論社、1993年、p.23.
- ⑥若林幹夫『熱い都市・冷たい都市』弘文堂、1992年、pp.182-183.

[展開部 I (パート1)]

- ①東洋経済新報社編『全図解日本企業のアジア進出マップ』東洋経済新報社、1995年、p.66,67.
- ②加納弘勝『第三世界の比較社会論』有信堂、1996年、p.127.
- ③渡辺利夫『アジア経済をどう捉えるか』NHKブックス、1986年、p.105.
- ④『ビジュアルシリーズ世界再発見7 東南アジア・オセアニア』同朋社、1992年、p.49.
- ⑤綾部恒雄・永積昭『もっと知りたいフィリピン』弘文堂、1983年、p.55.
- ⑥『ビジュアルシリーズ』前掲書④、p.54.

- ⑦『朝日百科世界の地理9南アジア・オセアニア』朝日新聞社、1986年、p.146.
- ⑧中西徹『スラムの経済学』東京大学出版会、1991年、p.47.
- ⑨新津晃一・橋本祐子『資料表：発展途上国4都市のスラム比較調査』『アジア経済』XXV-4、1984年、p.137.
- ⑩中西徹、前掲書⑧、p.112.
- ⑪渡辺利夫『開発経済学—経済学と現代アジア—』日本評論社、1986年、p.162.
- ⑫新津晃一・橋本祐子、前掲論文⑨、p.136表12.
- ⑬渡辺利夫、前掲書⑩、p.166.
- ⑭新津晃一・橋本祐子、前掲論文⑨、p.138表18.
- ⑮中西徹、前掲書⑧、p.112.
- ⑯藤田弘夫・吉原直樹『都市とモダニティー』ミネルヴァ書房、1995年、p.72.
- ⑰渡辺利夫、前掲書⑩、p.168.
- ⑱大阪市立大学経済研究所『世界の大都市3メキシコ・シティ』東京大学出版会、1987年、p.123表3-16.
- ⑲加納弘勝、前掲書②、p.127.

[展開部 I (パート2)]

- ①『朝日百科世界の地理12ラテンアメリカ』朝日新聞社、1986年、p.188.
- ②斎藤広志・中川文雄『世界現代史33ラテンアメリカ現代史』

I】山川出版社, 1978年, pp.259-260.

- ③石井章編『ラテンアメリカの都市と農業』アジア経済研究所, 1988年, pp.146-147.
- ④国元伊予・乗浩子編『ラテンアメリカの都市と社会』新評社, 1991年, p.374.
- ⑤『朝日百科世界の地理12』朝日新聞社, 1986年, p.188.
- ⑥後藤政子『現代のラテンアメリカ』時事通信社, 1982年, pp.154-155.
- ⑦横山昭一『首都』大明堂, 1988年, p.22.
- ⑧同上書, pp.20-21.
- ⑨後藤政子, 前掲書⑥, pp.154-155.
- ⑩山本正三訳『ラテンアメリカ入門』二宮書店, 1996年, pp.56-57.
- ⑪同上書, p.56-57.
- ⑫『朝日百科世界の地理12』朝日新聞社, 1986年, p.189.
- ⑬同上書, p.189.
- ⑭同上書, p.188.
- ⑮松本重治『ラテンアメリカハンドブック』講談社, 1985年, p.118.
- ⑯内仲英輔『首都移転』朝日新聞社, 1996年, p.125.
- ⑰同上書, p.125.

【展開部 I (パート3)】

- ①井上繁『都市づくりの発想—世界にみるシティー・カルチャー—』丸善ライブラリー, 1996年, p.94.
- ②清水克祐『アメリカ州別文化事典』名著普及会, 1986年, p.700,703.
- ③ニール・R・ピアス『THEBOOKOFAMERICA』実業之日本社, 1985年, pp.703-704.
- ④徳久球雄ら訳『ゾーファー宗教地理学』大明堂, 1971年, pp.103-104.
- ⑤猿谷要『地域からの世界史第15巻北アメリカ』朝日新聞社, 1992年, pp.120-121.
- ⑥鈴木健次・櫻井元雄訳『アステリア・クックのアメリカ史(下)』NHKブックス, 1994年, p.12.
- ⑦森孝一『宗教から読むアメリカ』講談社, 1996年, pp.116-117.
- ⑧井上繁, 前掲書①, p.92.
- ⑨清水克祐, 前掲書②, p.702.
- ⑩R・H・フェレル『図説アメリカ歴史地図』原書房, 1994年, p.84.
- ⑪森孝一, 前掲書⑦, pp.116-117, p.120.
- ⑫同上書, p.117.
- ⑬同上書, p.117.
- ⑭佐々木宏幹・村竹精一『宗教人類学』新曜社, 1994年, pp.193-194.

- ⑮荒木美智雄監『図説世界の宗教大事典』ぎょうせい, 1991年, pp.270-271.
- ⑯田村秀活編『イスラムの盟主サウジアラビア』読売新聞社, 1991年, pp.93-95.
- ⑰山川さら訳『ビジュアルデータ・アトラス』同朋社出版, 1995年, pp.232-233.

【展開部 II (パート4)】

- ①向山宏他編『高等学校世界史B』第一学習社, 1994年, p.254.
- ②『週刊朝日百科世界の歴史116』朝日新聞社, p.731.
- ③『週刊朝日百科世界の歴史121』朝日新聞社, p.770.
- ④石井規衛他訳『A・ノーヴン連連経済史』岩波書店, p.213.
- ⑤同上書, p.205.
- ⑥同上書, p.202.
- ⑦樺山紘一監訳『パノラマ世界の歴史』講談社, 1996年, p.322.
- ⑧同上書, p.322.
- ⑨石井規衛他訳, 前掲書④, p.202.
- ⑩外川継男監訳『世界文化地理大百科ロシア・ソ連史』朝倉書店, 1992年, p.172.
- ⑪藤田弘夫『都市の論理』中央公論社, 1993年, p.145.
- ⑫樺山紘一監訳, 前掲書⑦, p.300.
- ⑬『週刊朝日百科世界の歴史106』朝日新聞社, p.694.
- ⑭大西健夫・岸上慎太郎編『EUの政策と理念』早稲田大学出版部, 1995年, p.87.
- ⑮『クロニク世界全史』講談社, 1994年, pp.734-735.

【終結部】

- ①矢野恒太記念会編『日本国勢図会1996/97年年版』国勢社, 1996年, p.79.
- ②同上書, pp.91-92.
- ③岡本幸治・木村雅昭編『現代政治を解説する』ミネルヴァ書房, 1990年, p.189.
- ④同上書, pp.190-191.
- ⑤吉田和男『日本の国家予算』講談社, 1996年, p.81, p.95,100,102,105.
- ⑥K・V・ウォルフレン『日本/権力構造の謎(上)』早川書房, 1990年, pp.128-129.

【註】

- 1) K・V・ウォルフレン/篠原勝『人間を幸福にしない日本というシステム』毎日新聞社, 1994年, pp.20-24.
- 2) 藤田弘夫『都市と権力』創文社, 1991年, などを中心に新都市社会学の成果を参考にした。
- 3) 森孝治『社会科授業構成の理論と方法』明治図書, 1978年, pp.143-165.